

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

6月



「誰もが暮らしやすい地域社会を目指して」

—今、私たちができること— 前編

令和7年二月二十三日にライフパーク倉敷で開催された、倉敷市青少年健全育成推進大会 講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、ノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科准教授 インクルーシブ教育研究センター長 青山 新吾（あおやま・しんご）先生です。

● インクルーシブ教育とは

みなさんこんにちは。私は、もともと特別支援教育を専門にしていました。今は、特別支援も含めて、人と人がともに生きるかたちを探って、学生たちと一緒に日々研究しています。学内にはインクルーシブ教育研究センターという組織がありまして、そのセンター長も兼任しています。

今は、社会が変化する過程だと思っています。多様性という価値観がすごく広まって、随分社会が変わってきたのではないのでしょうか。学校でも、制服や体操服の在り方など、前だったらそんなに話題にもならなかったようなことが、今は大切なことになっている。それが変化だと思いますし、人権意識も随分変化しています。

ここから私たちにできることを考えて

いくにあたり、一つだけお伝えします。対立軸を作って、こっちかあっちかみたいな話にならないようにするにはどうすればいいのか。それが、人がともに生きるかたちのヒントになるんじゃないのか。対立軸を作らずに考えていくヒントとして、インクルーシブな考え方が重要かもしれない。この軸に従って、話していこうと思います。

インクルーシブ教育という言葉も、そもそも聞いたことありますか。聞いたことがあったら、これって何だと思えますか。何が思い浮かびますか。割とよく使われる日本語の訳語としては、包摂とか、包摂性という言葉が出てきます。皆さんの日常生活で、この言葉を使うことはありますか。「私たちのクラスは包摂性が高い」と

か、「私たちの町は、包摂性の高い町だね」とか、使いますか？ 大切という割には、あまり使わない気がするんですよ。

日常的にはあまり使わない。そういうときには、反対語を考えるといいかもしれません。反対語は、英語だとエクスクルーシブ、排除するという言葉だから、「インクルーシブ教育って何か」って考えたら、「エクスクルーシブじゃない教育」、つまり、排除しない、誰も排除されない教育って何か、って。日常の言葉で考えるなら、こういうことなのかなと。これを共有してから進めていこうと思って紹介しました。

ただ、今、日本で、インクルーシブ教育が出てくる場合に、少し混乱があります。なぜかというと、文部科学省は「インクルーシブ教育システム」と必ず使いますが、「インクルーシブ教育」と、ちよつと定義が違ふんです。インクルーシブ教育システムは、「障害のある子どもとない子どもが、ともに生活し、学び、育ていこう」という意味で、障がいのある子を対象に使います。ですが、インクルーシブ教育と世界的に言う場合は、一般的には、障がいのある子どもだけを対象とはしません。すべての子ども、マイノリティを対象と考えるのが一般的です。なので、文部科学省は、かなり限定的なんですね。今日は、障がいのある

子の話だけでなく、世界的に言っているインクルーシブ教育の話します。

ユネスコの定義から、僕が大切と思っていることを三点伝えます。一点目、対象は障がいのある子どもではなく、すべての子どもです。二点目、教育システム自体は子どもたちの多様性に合わせて変えていくものです。つまり、「今ある教育にいろんな子を入れるようにしよう」、じゃなくて、「いろんな子どもたちがいるから、教育そのものを変えていこう」と言っています。これは当たり前のように、実はものすごく大切で、難しいことだと思います。三点目、模索し続けること。つまり、はつきりした答えはないけど、進み続けるっていうようなことを言っている。

僕自身は、インクルーシブ教育とは、「マイノリティを含むすべての子どもたちを包摂する教育システムを構築するプロセス」だと考えています。人が人とともに生きる形をつくっていく。つまり、子どもたちはやがて、社会の担い手となるわけだから、どんな社会をつくっていくか。それは、共生社会というか、多様な人がともに生きることができるといって進んでいくことだと思います。いろんな視点があるんですけど、今日は特に、人権、個別環境そのあたりに焦点を当てて話します。



南中学校 3年 杉野 凌介 (令和6年度)

「まちなみ」(切り絵)

先輩が作っていたので挑戦しました。思っていたより難しかったです。授業中に完成せず家でも作業をして、ようやく完成しました。

●「やさしいどうして?」

ある教室の授業の話です。これ、こういう教育を否定する意図はないです。クラス全員を起立させて、教科書をここからここまで自分で読んで、読み終わった人から座りましょうっていう授業を受けたことないですか?よく見ると、最後まで立っている子は毎回大体決まっています。

先生が、最後まで座れなかった子どもに「ちゃんと練習してきた?」って声をかけていた。つまり、暗に「読むのが遅いのは、練習が足りないからじゃないか」と言っているわけです。そしたら、その子が黙って下を向いている。先生も困ったんでしょ。「家でしっかり練習しておいで」って言う。でも、子どもは黙って下を向いたまま。

「わかった?練習してくるんよ?」って先生は言うけど、黙っていると光景がありました。そのときにふと思うんですよ。「練習しておいで」かあ。確かに練習不足の人も、いるかもしれません。でも、読むのが遅いのは、本当に練習してないからでしょうか?「なにかを習得するには人の何倍も練習しないと」みたいな、そういう考えもありますよね。

そんなとき、学生や若い先生たちが「どうして、読むのがいつも最後になるのかな」と考えるまなざしを子どもに向けられるかどうか、実はすごく大切なんです。

十年以上前、大学の講義でこの話をしたら、その後にある学生が「先生、子どもがうまくできなかったり、困ったりする場面があったときに、どうしてかなってまなざしを向けることが大切なんですよ。私、『どうして?』が大嫌いです」ってわざわざ言いにきた。よっぽど言いたいんだろうなと思うたから、嫌だったことを謝って、「どうして嫌いなのか」と質問しました。彼女は「先生、私、大学生になるまで、両親から、『どうしてそれをやるの?』どうして?」って言われまくってきたから、もう嫌で」と教えてくれました。「そう、申し訳なかったね」って言ったら、「違う」と。「先生の『どうして?』は、私の知っているの

とは違って、『やさしいどうして?』だと思っんです。『どうしてそれ難しいかなあ、一緒に考えようか。どうしてそれできなかったかなあ、一緒に考えようか』っていうどうしてじゃないですか。先生のは、『やさしいどうして?』なんです、そう言いました。改めて、言葉って大切ななと思って、それ以来、講演、講義、原稿論文など、全部、「やさしいどうして?」にしています。彼女が使っていいって言うてくれたので。

「やさしいどうして?」っていうまなざしを向けることが、すごく大切なんだろうなと思っんです。ちなみに、教員や保育士の卒業生は、よく研究室に遊びにきて言います。「先生、『やさしいどうして?』

で、結構救われています。子どもが、宿題絶対持つてくるって言った次の日に「忘れた」って言うて強く叱りそうになつてるとき、『やさしいどうして?』を思い出して、さらに、語尾に『かな』をつけて、『どうして忘れたのかなあ』って、最後に『かな』をつけたら、ちよつと、気持ちが和らぐんです。やさしいどうしては、語尾に『かな』をつけること、って講演でおっしゃればいいのに、と卒業生たちが言いました。

さっきの話は、「どうしていつも最後まで本が読めなくて立っているのかな?」じゃないですか。「やさしいどうして?」

です。例えば、吃音のある子がいます。もちろん、吃音のある子にも、音読の苦手な子も得意な子もいたり、音読はできるけどおしゃべりは苦手という子もいたり、多様なんですね。もし音読が苦手な吃音のある子だしたら、いつも読み終わらない。

学生にこういう話をしたら、「小さいとき、読み終わってなくても読んだふりして座ってた」って言うんですよね。読むこと自体の困難性があるような、発達に課題のある子どもたちもいるし、いわゆる場面緘黙、学校、教室ではおしゃべりできないとか、いろんな子たちがいる。

つまり、「明日までに練習してきなよ」という話とは全く違う理由で読めない子たちがいるかもしれないから、言動の背景にまなざしを向けて、いろんな子たちがいることを考えていく。

そのときのやりとりのきっかけになるのが、「やさしいどうして?」そして、若者に言わせると、ポイントは語尾に『かな』だそうなんです。このようなことを考えていくのが、実は地域社会でいろんな人たちが生活しやすいことになることに繋がっていく、一つのきっかけなのかもしれないなと思って、教室の例を話してみました。

(来月に続く)